

初めて處女作が世に出た時

水野仙子

一たい處女作とはどういふものをさしていつてゐるのか私にはわかりませんから困ります。初めて書いたものついていふ意味なら、私はまだ、自分の作が世間に紹介されば、子供の時分投書などをしてた時分のことにありますし、そこによつて認められたといふやうな意味を含んでるものならば、私にはまだ處女作がないともいへます。まだ書いてゐないつもりでも居ります。たゞ初めて文壇に出た作といふのならば、六七年前に『趣味』に出た「ひと夜」がそれでございませう。また同じ月の文章世界に「くすり湯」といふのが出たと思ひます。その時

分私はまだ先生の家に御厄介になつてしまつたから、原稿も無論先生の手から行きまして、私はまだ、自分の作が世間に紹介されど、それなどゝは思つてませんでしたから、怖いやうな樂しいやうな氣がして雑誌の出るのを待つて居りました。やがて雑誌が出ました。併し自分の書いたものが活字にならぬのは馴れてましたから、さう際だつた感じも残つてませんが、たゞ本欄に有名な作家達と並んで自分の作が置かれてあるといふのが馬鹿に嬉しいやうな氣がしました。

と仰言ひました。それからは毎日先生のお歸りが楽しみでした。毎日一つ二つは新聞の切りぬきを持つて来て下さいましたから。萬朝だの、中央だの、大阪毎日だの、國民だのと、それにたいていみなほめてありましたから餘計うれしうございました。先生は「これにはつておきたまへ」といつてスクランブルアーチを下さいましたから、丁寧にそれを張りつけて、なほ一々それに新聞の名と日とを書き入れたものでした。スクランブルアーチは今もそのまゝそれきりになつて居ります。

つちこちの新聞にその批評が載つてゐたことで、先生が或日博文館から歸られると、「おい君、今日の讀賣に君の小説の評が出てゐたぜ、ほめてあつた。今日は忘れて來たがあした切りぬいて持つて来てやらう。」